



2025年 6月6日 金曜日
(令和7年)

知・技の創造

ものづくり大学発

▷115◁

皆さんは「揚舟(あげぶね)」において避難用具として活用という舟を「存じ」できるようにできる舟のデザインを考案し

町田 由徳 情報メカトロニクス学科准教授

「揚舟」の復権を目指して

揚舟とは、洪水が頻発する地域で使われていた小型の舟で、普段は軒下などに吊るして保管し、水害時に人や家畜を乗せて避難するために使用されていました。埼玉県近郊では、群馬県板倉町をはじめとする渡瀬川流域で使用されてきたことが知られています。

私の研究室に所属するバンングラデッシュ出身の留学生、フオイスルさんは、この揚舟を現代的に再解釈し、洪水被害が深刻な母国バンングラデッシュ

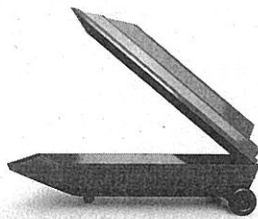
面もあります。

しかし、さらに深刻なのが「ボンナ」と呼ばれる大規模な洪水です。これは10年に一度ほどの頻度で発生し、河川の増水により国土の3分の1から半分以上が冠水する。大きな被害をもたらします。一つした洪水により多くの

では、木材よりも軽量で耐久性に優れたFRP(繊維強化プラスチック)を素材に使用することを前提とし、さらに車輪を取り付けることで、力の弱い人でも容易に避難できるような工夫されています。

船体の形状は、1/15スケールの模型を複数製作して比

デザインした舟の側面



ンパクトに重ねて輸送できる構造となっており、ワンボックスカーや2トトラックの荷台にも積載可能なサイズで設計されています。これにより輸送コストの削減が図られており、販売価格は3万5000タカ(日本円で約5万円)程度に抑えられる見込みです。

最大の特徴は、普段は「蓋」として機能しているフロート部分にあります。このフロートは水上で展開することにより、舟の安定性と積載能力が大きく向上し、最大で400kgの荷物を載せることが可能です。

また、船体とフロートはコす。

また、よしのり 東京造形大学デザイン学科卒業後、デザイン事務所勤務、岡崎女子短期大学准教授を経て、2020年より現職。専門はプロダクトデザイン。

